

第 II 編

多羅ヶ迫遺跡報告編

1章 多羅ヶ迫遺跡の環境

第1節 多羅ヶ迫遺跡の立地（第13図）

多羅ヶ迫遺跡は、指宿市大字小牧小字多羅ヶ迫928に位置している。

多羅ヶ迫遺跡は、標高90mを測る山間部の谷部に遺跡が形成されており、多羅ヶ迫遺跡の北東と南西に位置している尾根との比高差は約10mを測る。多羅ヶ迫遺跡が所在する谷部や北東と南西に隣接する尾根は、いずれも標高243.5mを測る山裾から東側へ伸びているものである。

遺跡の東側には湧水跡もあり、指宿市と鹿児島市喜入地区との市境を流れる田貫川の一枝流となっていた時期もあったと考えられる。この湧水も含めた流水作用によって、遺跡が立地している谷部を形成したものと推測できる。

後述する多羅ヶ迫遺跡の周辺遺跡である西多羅ヶ迫遺跡や小牧遺跡群、岩本遺跡などの立地は、尾根・丘陵もしくは戸戸火幹流堆積の台地上に形成されている。多羅ヶ迫遺跡が立地している谷部での遺跡の発見例は、指宿市内で行われた発掘調査において初例となる。

第2節 周辺の遺跡と多羅ヶ迫遺跡（第3図）

多羅ヶ迫遺跡の周辺には、後期旧石器時代と縄文時代早期を中心とした遺跡が多く点在している。

まず、多羅ヶ迫遺跡と隣接している遺跡としては、西多羅ヶ迫遺跡が挙げられる。多羅ヶ迫遺跡と西多羅ヶ迫遺跡とは尾根と谷を隔てた遺跡であり、直線距離で150mしか離れていない。前述したが、多羅ヶ迫遺跡は谷部に、西多羅ヶ迫遺跡は尾根上に形成された遺跡であり、地形的に異なる両遺跡の遺跡形成において注視されるものである。

西多羅ヶ迫遺跡は、多羅ヶ迫遺跡と同様に広域営農団地農道整備事業に伴って平成14・15・17・18年度と4ヶ年度に渡って発掘調査された遺跡である。西多羅ヶ迫遺跡では、後期旧石器時代、縄文時代草創期・早期・後期、中世の複数時期の遺物包含層が確認された。特に、後期旧石器時代では、A T下位、A T上位のナイフ形石器文化、細石刃文化が確認され、A T下位の出土遺物の層位と石器の技術的形態から後期旧石器時代初頭に位置づけられている。

後期旧石器時代の他の遺跡としては、小牧Ⅲ A遺跡や露重遺跡、尾越遺跡、堀添遺跡などからなる小牧遺跡群がある。ここでは、特に、小牧Ⅲ A遺跡では、A T上位のナイフ形石器文化（剥片尖頭器・三稜尖頭器などを主体）や細石刃文化の遺物包含層が確認されている。

また、縄文時代早期の遺跡としては、岩本遺跡や小牧Ⅲ A遺跡、西多羅ヶ迫遺跡が挙げられる。いずれも岩本式土器から前平式土器を主体とした縄文時代早期初頭から前半にかけての遺跡である。岩本遺跡は「岩本式土器」の標識遺跡であり、質・量ともに鹿児島県内の縄文時代早期初頭の時期に帰属する遺跡の中で、比較的規模の大きな集落を形成していたであろうと評価されている。

小牧遺跡群の東側に隣接する北迫遺跡では、多羅ヶ迫遺跡で検出された堅穴状遺構と同時期と考えられる縄文時代後期の市来式土器や指宿式が表面採集されている。

また、小牧遺跡群内にある小久保遺跡では、縄文時代晩期の浅鉢や深鉢の黒色磨研土器と粗製土器片が出土している。

このようなことから、多羅ヶ迫遺跡がある谷部や小牧台地などの周辺には、後期旧石器時代をはじめ、縄文時代後期・晩期に帰属する遺跡が広がっているものと予察される。

参考文献

指宿市教育委員会 1979年 「小牧第Ⅱ調査区」

指宿市教育委員会 2002年 「北迫遺跡」「小久保遺跡」「水迫遺跡Ⅱ」



第13図 道路の位置図 ($S = 1/20,000$)

第2章 発掘調査の経緯と組織

第1節 発掘調査の経緯

多羅ヶ迫遺跡の発掘調査及び報告書作成は、鹿児島県農政部・鹿児島地域振興局（当時、鹿児島耕地事務所）が整備を進めている広域営農団地農道整備事業南薩東部地区2区間（幸屋-小牧）に伴うものである。この区間の文化財包蔵地の有無を目的とした分布調査や確認調査の実施時期については、平成10年11月頃の協議から議題として挙げられていたが、路線案は決定しているものの事業用地が未買収であったため、具体的に進んでいなかった。

平成12年2月28日に県文化財課と指宿市教育委員会による分布調査によって、土器片、石器片が表面採集されたことで多羅ヶ迫遺跡が新発見された。遺跡の所在する小字名から「多羅ヶ迫遺跡」とした。

平成12年3月2日の四者協議の結果、広域農道計画路線図のNo49～No58の長さ約180m、面積約5,300m²が対象範囲となり、遺物包含層の有無を目的とした確認調査を指宿市教育委員会が3月末までに実施することとなった。

平成12年3月に、土愛喜遺跡と西多羅ヶ迫遺跡と併せて多羅ヶ迫遺跡内で確認調査を実施した。対象範囲内に3ヶ所のトレンチを設定し、火山灰除去や作業員の安全確保のため一部重機を使いながら遺物包含層の有無と広がりの範囲の確認を行った。その結果、下表のとおり後期旧石器時代、縄文時代後期、中世に帰属する遺構の検出や上器片の出土を確認した。

トレンチ名	確 認 調 査 結 果	備 考
1トレンチ	縄文時代草創期から後期旧石器時代の土坑を検出	自然の落込みであると判定
2トレンチ	中世の土器片・ピットを検出	
3トレンチ	縄文時代の竪穴状遺構を検出	

確認調査の結果を踏まえ、多羅ヶ迫遺跡の記録保存の実施時期について、鹿児島県農政課・鹿児島耕地事務所・指宿市役所耕地課の開発部局と鹿児島県教育庁文化財課・指宿市教育委員会社会教育課と数回に亘って協議を行った。その結果、平成13年度に多羅ヶ迫遺跡の発掘調査を実施することとなり、鹿児島耕地事務所と指宿市が委託契約を締結し、指宿市教育委員会が発掘調査を実施した。

報告書作成時期については、広域農道整備事業に関連する水迫遺跡や幸屋遺跡、西多羅ヶ迫遺跡などの発掘調査などと調整を行った結果、平成20年度に幸屋遺跡と同時に作成して刊行することになった。

遺 跡 名	時代・時期	発掘調査年度	報告書刊行年度
中尾迫遺跡	弥生時代中期・後期、中世	平成9年度	平成16年度
水迫遺跡	後期旧石器時代（A T上下のナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代草創期・早期、弥生時代中期	平成11・12年度	平成13年度
多羅ヶ迫遺跡	縄文時代後期、中世	平成13年度	平成20年度
幸屋遺跡	縄文時代	平成17年度	平成20年度
西多羅ヶ迫遺跡	後期旧石器時代（A T上下のナイフ形石器文化・細石刃文化）、縄文時代草創期・早期	平成14・15・17・18年度	平成22年度予定

第3表 広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存処置一覧表

第2節 発掘調査・報告書作成組織

西多羅ヶ迫遺跡の発掘調査は、平成13年9月13日から平成14年2月28日まで行われた。

また、報告書作成は平成20年5月16日から平成21年3月30日まで行なわれた。下記にその発掘調査と報告書作成時の組織を記す。

①発掘調査【平成13年度】

事業主体	鹿児島耕地事務所	教育長	山下 华雄
発掘調査主体	指宿市教育委員会	教育次長	田之畑正志
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	社会教育課長	山崎 忠明
発掘調査担当者	指宿市教育委員会	社会教育係長	川畑 忠晴
		参 事 捕	木之下明夫
		派遣社会教育主事	下南 達朗
		社会教育係主事	坂元 智博
		社会教育係主事	岩下まり子
		文化係長	枝田 富雄
		文化係主査	前原 寿
		文化係主査	福永 清子
		文化係主査	下山 党
		文化係主査	中摩浩太郎
		文化係主事	渡部 徹也
		文化係主事	鎌田 洋昭

②報告書作成の組織【平成20年度】

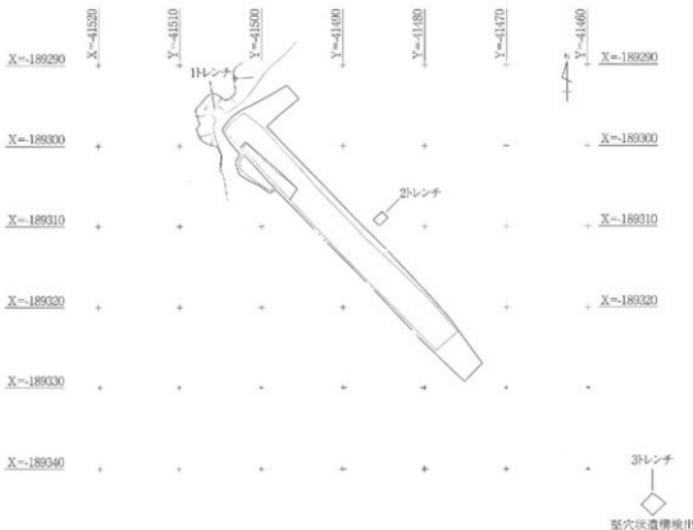
事業主体	鹿児島地域振興局	教育長	田中 民也
報告書作成主体	指宿市教育委員会	教育部長	屋代 和雄
報告書作成責任者	指宿市教育委員会	社会教育課長	大浦 誠
報告書作成担当者	指宿市教育委員会	社会教育係主査	川路 肇
		社会教育係主査	東中川睦子
		社会教育係主査	宮地 主税
		社会教育係主査	西村陽一郎
		社会教育係主査	大道 祐子
		主幹兼文化係長	下玉利 泉
		文化係主査(学芸員)	中摩浩太郎
		文化係主査(学芸員)	渡部 徹也
		文化係主査(学芸員)	鎌田 洋昭
		文化係主事(学芸員)	吹留 義輝

第3章 発掘調査

第1節 発掘調査区の設定

多羅ヶ迫遺跡は、小牧遺跡群の北西の山間部の谷地形に位置する。広域農道整備事業では、北に隣接する西多羅ヶ迫遺跡を削平し、多羅ヶ迫遺跡が立地する谷部分に土盛りをする計画であったことから、盛土の範囲が調査対象地となった。

試掘段階において、中世の遺物包含層と後期旧石器時代相当層が把握されていたことと、埋没谷と見られる地形的特徴から、北側部分の尾根に接する斜面から谷部分の中心にかけて、東西幅5m・南北長さ43mの調査区を設置した。同時に、南側の尾根にかけての斜面にテストピットを3ヶ所設定、遺跡の状況を確認しながら調査を実施した。



第14図 トレンチ配置図 (S=1/600)

第2節 基本層序

既述のように、多羅ヶ迫遺跡は南北の尾根に挟まれた埋没谷である。このため、層序は谷の中央部分に向かいレンズ状の堆積を見せるが、上位層は水平堆積に近い状態を呈する。堆積の傾斜状態は第6層鬼界カルデラ火山灰層とその直上の第4層暗褐色土層までが強く、その後堆積の傾斜はゆるやかになり、第2層中世黒褐色土前後ではほぼ水平に近い堆積となる。このことから、古代以降には埋没谷の形成が進んだものと考えられる。

調査区で確認される火山灰層は、第6層鬼界カルデラ噴出物層と第11層姶良カルデラ噴出物層である。第11層は大隅降下輕石堆積層が主体となり、入戸火碎流堆積物は第11層の下位にブロック状に混ざりこんで見られるのみである。また、第6層と第11層の間に降下した火山灰（岩本火山灰・サツマ火山灰）については、一層を形成せず、層位の中に混在した状況を見る。

遺物包含層は、第2層・第3層の古代・中世相当層に限定される。第6層鬼界カルデラ火山灰層上面では、第5層を埋土とするピットが検出されるが、第5層中には遺物が見られなかった。

第1層	表土
第2層	黒色褐色土　：中世遺物包含層・壇跡検出
第3層	褐色土　：古代遺物包含層（橋牟礼川遺跡第6層類似層）
第4層	暗褐色度　：無遺物層
第5層	黒色褐色土　：無遺物層・層中に池田カルデラ噴出物ブロック
第6層	黄褐色火山灰層：鬼界カルデラ噴出物層
第7層	茶褐色土　：縄文時代早期相当層・無遺物層
第8層	褐色土　：サツマ火山灰バシス混在層（水迫遺跡第7層相当層）・無遺物層
第9層	暗褐色土　：岩本火山灰混在層（水迫遺跡第9層相当層）・無遺物層
第10層	黒褐色土　：水迫遺跡第10層相当層・無遺物層
第11層	黄褐色輕石層　：大隅降下軽石堆積層

第15図 多羅ヶ迫遺跡層位模式図

第3節 発掘調査成果

1. 崩跡（第18図）

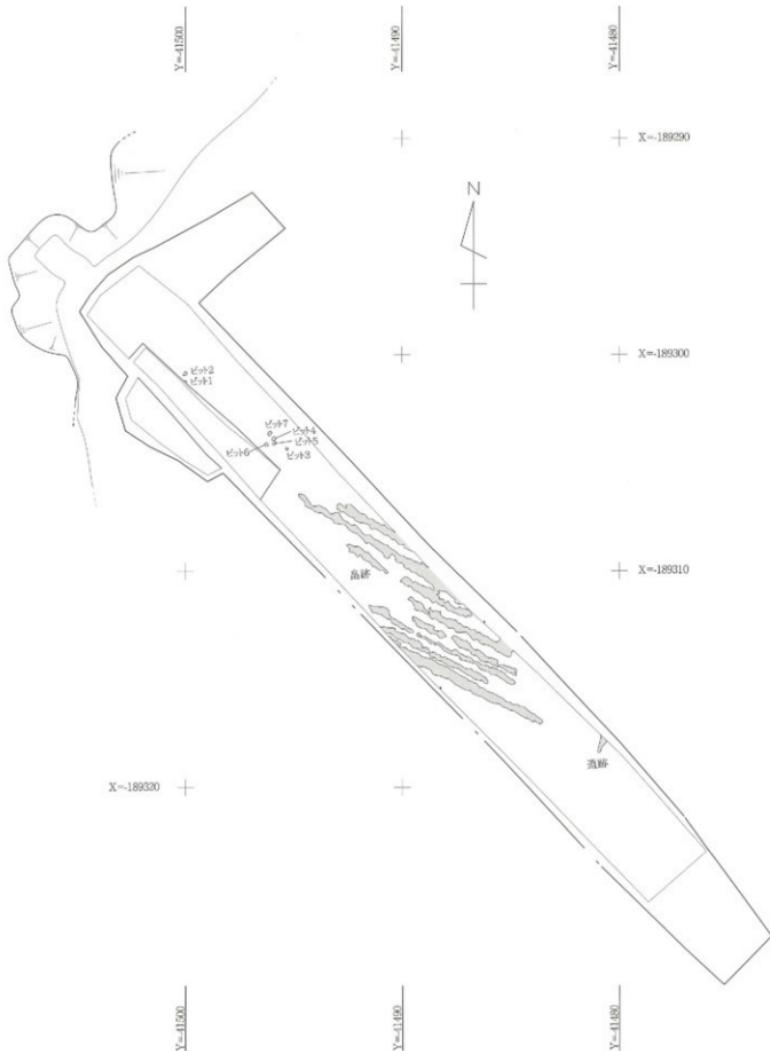
調査区中央付近の第2層中位において、壇跡と考えられる並行する溝状遺構を9条確認した。溝幅は最大で47cm、最小で27cmである。溝状遺構の深さは最大で10cm、最小で5cmを測る。浅いレンズ状の断面形状を呈する。南東-北西方向に軸をとる。検出された溝で最長のものは9.2mを測る。溝の中心間の距離は、50cm程度となる。溝の底部は凹凸が激しく、耕作痕と見られる。溝状遺構は壇の畠間溝が残存したものである。埋土色は、第2層よりやや薄い黒灰色の土壤となる。この土色の土壤は断面では観察されていないことと、遺構の検出が第2層の中位であったことから、壇の造営が第2層中から行われたことが考えられる。

2. ピット（第19図）

ピット1・2は第5層を埋土とする縄文時代のピットであり、ピット3・4・5・6・7は第2層を埋土とする中世のピットである。ピット1は直径25cm・深さ24cmである。ピット2は長軸43cm・短軸30cm・深さ24cmである。ピット3は長軸28cm・短軸20cm・深さ24cmである。ピット4は長軸40cm・短軸35cm・深さ24cmである。ピット5は長軸50cm・短軸36cm・深さ24cmである。ピット6は長軸38cm・短軸32cm・深さ24cmである。ピット7は長軸42cm・短軸26cm・深さ24cmである。

3. 積穴状遺構（第19図）

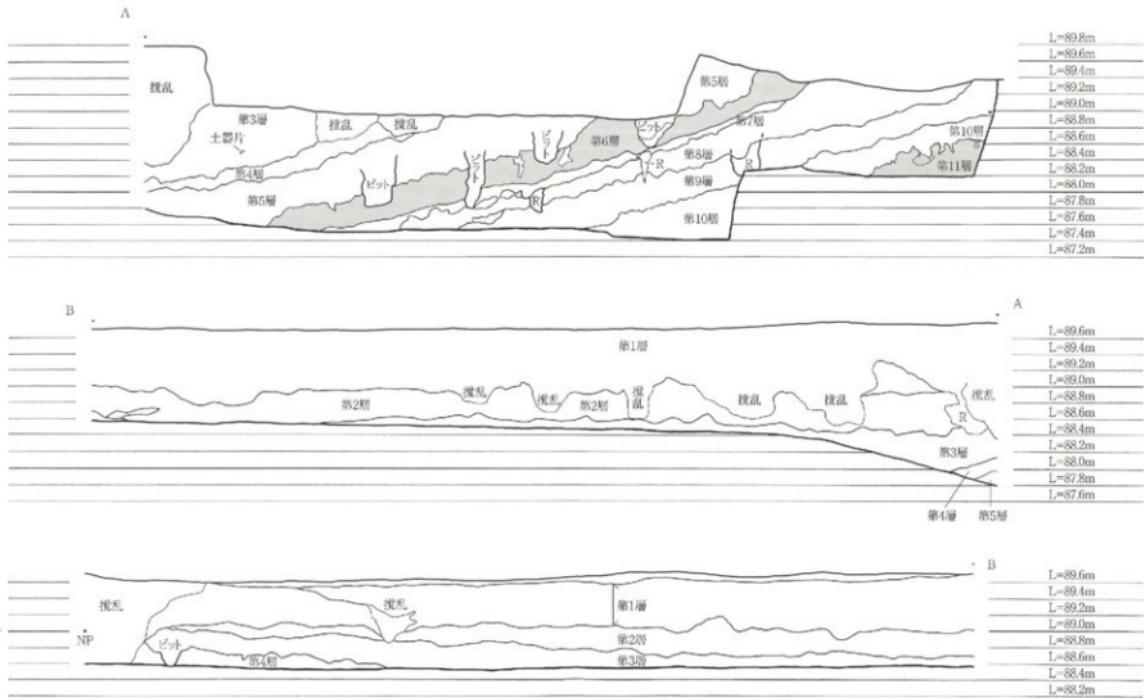
テストピット1において、第6層鬼界カルデラ火山灰層上面に黑色土を埋土とする、略方形の落ち込みを確認。断面観察から竪穴状遺構とした。長軸227cm・短軸165cm・深さ13.6cmを測る。底部に直径29.3cmのピットを検出した。炉跡などは検出されておらず、性格は不明である。

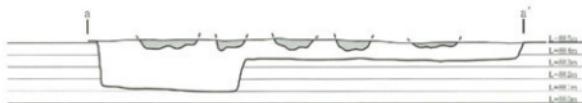
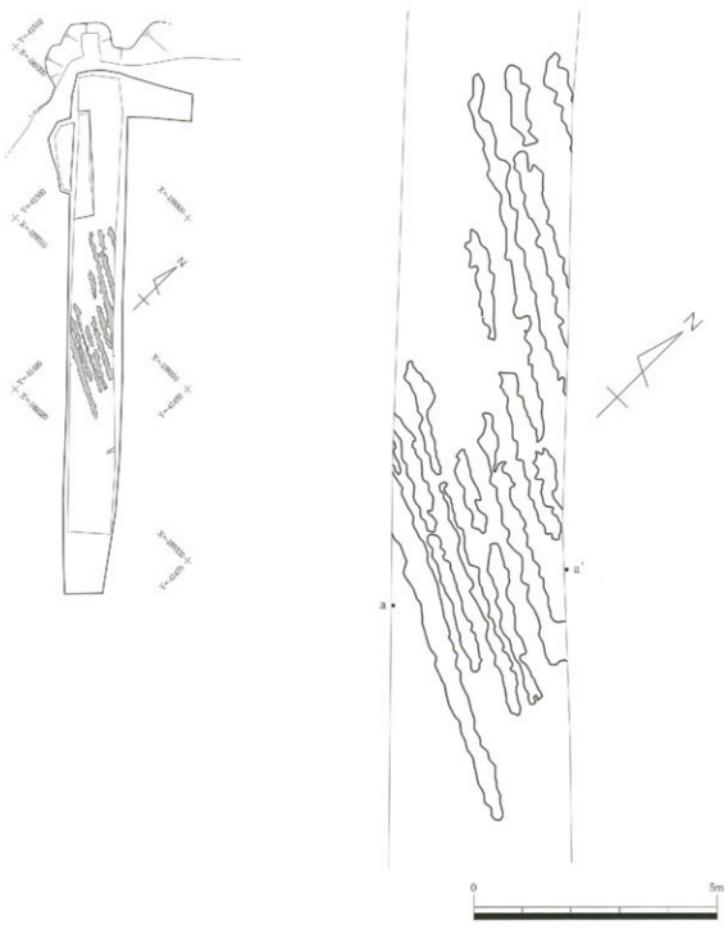


第16図 道構配置図 ($S=1/200$)

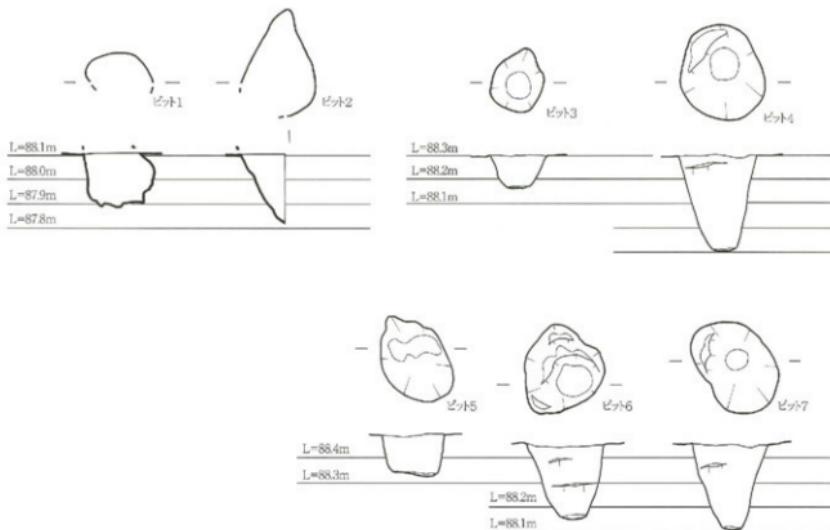
第17圖 地層剖面圖(S=1/60)

52

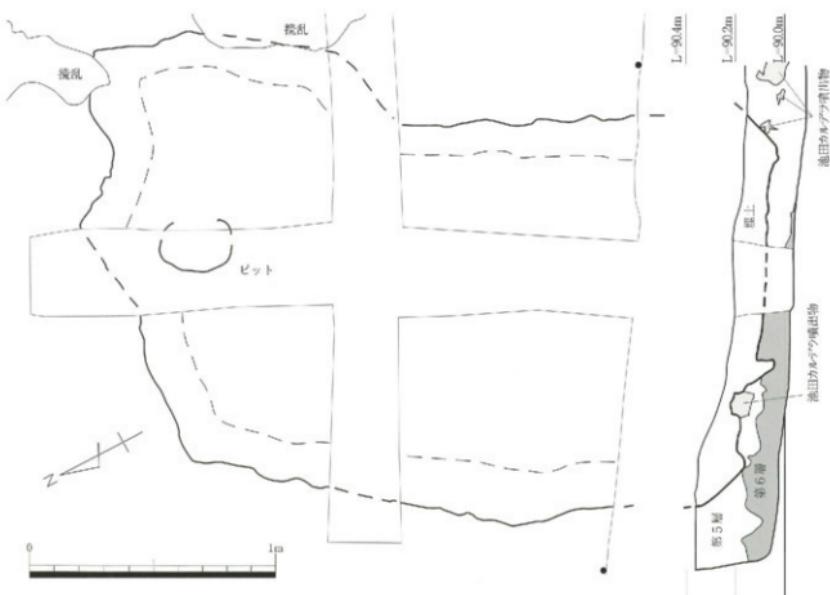




第18図 中世の畠平面図($S=1/100$)・断面図($S=1/80$)



第19図 ピット検出図 ($S=1/20$)



第20図 積穴住居検出図 ($S=1/20$)

第三編 発掘調査の成果

幸屋遺跡

幸屋遺跡の発掘調査と自然科学分析によって、次の知見を得ることができた。

幸屋遺跡では、始良カルデラ噴出物の入戸火碎流堆積をはじめ、岩本火山灰、薩摩火山灰、鬼界カルデラ噴出物、池田カルデラ噴出物の数多くの火山性噴出物の堆積を確認した。

特に、火山ガラスと軽石の分析から、岩本火山灰は複数回の噴火による可能性が導き出された（早田2009 本紙掲載）。岩本火山灰は、後期旧石器時代のナイフ形石器文化終末期と縄石刃文化初期を検討する上で鍵層のひとつである。放射性炭素年代測定によると、岩本火山灰の噴出年代は、 $16,790 \text{年} \pm 60 \text{年 B.P.}$ より古くならないことが導き出された（古環境研究所2009 本紙掲載）。

幸屋遺跡は、鬼界カルデラの噴出物である「幸屋火碎流」の命各地点と標識地點である。今回の調査において、幸屋火碎流は30~40cmの層厚を確認することができた。幸屋遺跡では、水迫遺跡や西多羅ヶ迫遺跡と同様に幸屋火碎流による倒木痕跡を確認することができた。倒木方向は概ね南西方向から北東方向へ雁行で倒されたと考えられる。炭化木などは検出できなかった。

幸屋遺跡では、入戸火碎流と薩摩火山灰との間層に、泥炭層をはじめ水成堆積層が確認された。2トレンチでは數枚の水成堆積層を、1トレンチでは数枚のものを確認した。このことから、より2トレンチ側に水成堆積層を成層する要因となった古沼か湿地帯が広がっていたものと考えられる。なお、発掘調査地点以外で泥炭層は第2図の●印で示している場所で確認されていることから、その環境の広がりを類推することができる。薩摩火山灰下位の泥炭層をサンプリングし自然科学分析を行い、いわゆる「寒の戻り」について、南薩地域における影響度合いの理解に努めたが、積極的にその影響があったとするデータは抽出できなかつた。植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析の結果の詳細は各報告を参照願いたい。

今回の調査によって、南薩地域における後期旧石器時代から縄文時代中期頃までの古環境を復行するための情報を得ることができた。

多羅ヶ迫遺跡

多羅ヶ迫遺跡の中世に帰属すると考えられる壠跡の検出については、指宿市内ではいくつか事例があるものの、標高90mの山間地谷間での耕作地としては、初めての事例となる。畠間溝からの遺物の出土がなく、正確な時期の特定ができるではないが、類例の増加によって、山間部への耕作地の拡大時期についての知見を得ることのできる事例となる。

今調査区では、鬼界カルデラ噴出物層の上面に検出された、縄文時代に帰属する遺構が検出されている。ピットと堅穴状遺構である。ピットについては、多羅ヶ迫遺跡調査の翌年以降実施した西多羅ヶ迫遺跡での同時期のピット検出の事例がある。特に北側斜面には、膨大な数のピットが検出されている。これらは、明確にプランを構成するものがほとんどないものである。多羅ヶ迫遺跡では平面検出が2基のみであったが、調査区壠面には複数のピットが確認された。いずれも第5層を埋土としたもので、深さ70cmを超えるものもある。検出例は西多羅ヶ迫遺跡同様に、明確なプランを形成しない。また、調査区北側の急斜面部にもこれが見られることから、地形にあまり関係なく設けられたものであることがわかる。遺構の時期については、多羅ヶ迫遺跡では池田カルデラ噴出物の堆積層がほとんど見られないため、確定できないものの、隣接する西多羅ヶ迫遺跡の事例は、池田カルデラ噴出物層の下位であり、縄文時代中期とみられる。

一方、堅穴状遺構については、性格は明らかではないが、池田カルデラ噴出物のブロックより上位からの掘削とみられ、ピット群より時期的に下るものと見られ、縄文時代後期に帰属すると考えられる。

このように、縄文時代の複数期と見られる遺構が検出されている。詳細な土地利用について述べることはできないが、北側尾根に立地する西多羅ヶ迫遺跡とともに、山間部の土地利用のあり方について今後検討すべき題材を示した例である。

第 IV 編

発掘調査の写真

第1節 幸屋遺跡



幸屋遺跡



写真5 1トレンチ東壁・南壁地層写真



写真8 1トレンチ南壁2段目地層



写真6 1トレンチ南壁地層写真
(中央部は、幸屋火砕流による横転)



写真9 1トレンチ南壁4段目地層写真



写真7 1トレンチ西壁地層写真



写真10 1トレンチ横転検出状況写真

幸屋遺跡



写真11 1トレンチ第2層上面検出状況写真
(白色の礫は尾下スコリア)



写真14 1トレンチ第4層上面検出状況写真
(中央部は幸屋火碎流による倒木痕)



写真12 1トレンチ尾下スコリア(第1b)検出状況写真



写真15 1トレンチ倒木痕(横転)検出状況写真

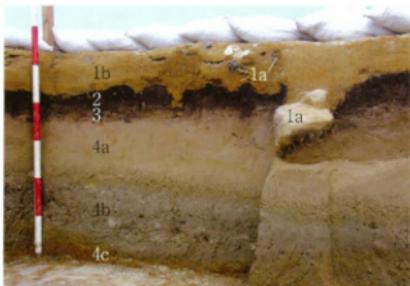


写真13 1トレンチ尾下スコリア(第1a)検出状況写真
(池崎火山灰降灰後、尾下スコリアが筛下し第2・
3層を突き抜き、第4a層上面まで達している。)



写真16 1トレンチ倒木痕横断面写真

幸屋遺跡

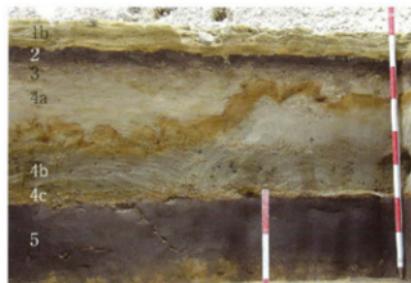


写真17 2トレンチ南壁1段目地層写真



写真20 2トレンチ東壁3段・4段目地層写真



写真18 2トレンチ東壁3段目地層写真



写真21 2トレンチ3段目北側地層写真



写真19 2トレンチ東壁4段目地層写真



写真22 2トレンチ3段目地層写真

幸屋遺跡



写真23 3トレンチ水成堆積層写真



写真26 3トレンチ地層剥ぎ取り実施状況写真



写真24 3トレンチ水成堆積層中検出の植物スタンプ①



写真27 3トレンチ地層剥ぎ取り写真



写真25 3トレンチ水成堆積層検出の植物スタンプ②



写真28 池田火砕流堆積状況写真(西壁法面)

第2節 多羅ヶ迫遺跡



写真29 多羅ヶ迫遺跡構造風景
(南東方向から北西方向を望む)



写真30 北側層位状況



写真31 岩跡検出状況
(西側より)



写真32 岩跡断面状況



写真33 ピット 1



写真34 ピット 2

多羅ヶ迫遺跡



写真35 遺跡



写真36 試掘時、竪穴状遺構検出状況



写真37 竪穴状遺構全景



写真38 竪穴状遺構埋土状況1



写真39 竪穴状遺構埋土状況2



写真40 完掘状況
(南東方向から北西方向へ望む)

報告書抄録

ふりがな	こうやいせき・たらがさこいせき
書名	幸屋遺跡・多羅ヶ迫遺跡
副書名	広域農業地農道整備事業南薩東部地区に関する埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	鎌田 洋昭 中摩 浩太郎 渡部 徹也
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館 C O C C O はしむれ)
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL:0993-23-5100
発行年月日	平成21年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
幸屋遺跡	いよいよし町内海だいじじかた 指宿市大字新西方 小字鳴ヶ城	46210	2-20	31°16'21"	130°34'46"	H17.7.6 H17.8.22	1T:156.7m ² 2T: 95.3 m ² 3T: 43.4 m ²	広域農業地 農道整備事業
多羅ヶ迫遺跡	いよいよし町内海だいじまち 指宿市大字小牧 小字多羅ヶ迫	46210	2-71	31°17'31"	130°33'52"	H13.9.13 H14.2.28	254m ²	広域農業地 農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
幸屋遺跡	包蔵地	縄文時代 後期石器時代			サツマ火山灰 上下に泥炭層を 確認
多羅ヶ迫遺跡	包蔵地	中世	壇跡・杭列・道跡		山間地谷間での 耕作地
		縄文時代	ピット・竪穴状遺構		

広域営農団地農道整備事業南薩東部地区に伴う発掘調査報告書第3集

幸屋遺跡・多羅ヶ迫遺跡

Kouya-Archaeological site
Taragasako-Archaeological site

平成 21 年 3 月
2009 March

発行
指宿市教育委員会
The Ibusuki Board of Education
鹿児島県指宿市十二町2290
Junichi2290 Ibusuki-city,Kagoshima Pref.Japan
TEL 0993-23-5100

印刷所
潤上印刷株式会社
鹿児島市樋之口町6-6
Tenojuchicho6-6 Kagoshima-city,Kagoshima Pref.Japan
TEL 099-225-2727

KOUYA—Archaeological site
TARAGASAKO—Archaeological site
2009 March
The Ibusuki Board of Education

